『モウビー・ディック』に於ける「鯨学」の見方　（その1）

上　田　見　二

はじめに

アメリカ文学の中で、ハーマン・メルヴィルの『モウビー・ディック』という小説ほど世界文学として汎く愛読されてきた作品も珍らしい。これは言うまでもない文学上の事実であるが、今日では最も大衆的な娯楽情報メディアであるテレビにまで同小説を原作にした各種の映画が上映されることは、シェイクスピアの『ハムレット』や『リア王』等と同じく決して珍しくないし、はたまた、ナイフなどの日常品にまで同名の登録商標を発見するに至ると、この作品の世界的な愛され方にあらためて驚かざるを得ない。

と同時に、この小説ほど、その世界的人気と裏腹に、一部分しか読まれない名作も古今東西を通じて珍らしいと言わねばならない。深い感動を得た読者の中のはたして何人が全章隈なく読破したであろうか。恐らく、極めて少数であろうと思われる。その理由は、誰もが認めるように、あの天才的に独創的で劇的な物語の展開の途中に、あまりにも頻繁に、しかも、あまりにも大量に、一見無関係としか考えられない章が挿入されているからである。鯨の種類、抹香鯨とせみ鯨の頭の比較論、鯨の生態学、人間と鯨の歴史的関係、鯨の骨の測量、仕止め鯨とはなれ鯨の相異、鯨の化石等々のおよそ鯨に関するありとあらゆる博物学的考察が異常に饒舌な語り口で展開されているからである。本論のタイトルに言う「鯨学」とは、作品の第32章の「鯨学」をも含めた、物語の本筋から一般的に言ってはずれた鯨についての博物学的諸章を指す総称である。（以下、この意味で「鯨学」という言葉を用いる。）

「鯨学」がこの作品に占める割合のいかに大きいかは、その目次を眺めれば一目瞭然だし、世に数ある各種縮刷版の割愛された部分とその結果であるページ数の減少の程度とを調べてみれば、なお一層実感として理解できるであろう。

縮刷版に共通している割愛法は、先ず「鯨学」を除き、次に一般的方法で短縮を試みていると言えるが、これは、縮刷版の作整（編集）法としては、特殊だと言わ

ねばならない。この特殊性の中に、われわれは『モウビー・ディック』という文学作品の特殊性を見ることが出来る。物語の展開とは関係ないと容易に判断できる章がかくも多く存在するという意味では、この小説ほど縮刷版の創り方が簡単な本もなかろう。

ところが一方、この小説ほど（価格の問題を別にすれば）縮刷版の必要ない本も珍しいのではなかろうか。なぜならば、物語の本筋と「鯨学」との質的相異が明瞭すぎるぐらい明瞭なのだから、読者の方で自分に適したように「縮刷」して読んでいくことが出来るからである。

事実、自分なりに割愛して読み進むことをしない読者は、メルヴィル（いや、イシュメイル）「鯨学」博士の講義に対して正直に興味を示すことの出来る極めてまれであろう読者層を除けば、好むと好まざるとに係らず拝聴せねばならぬ職業的読者に限られると言って誇張ではなかろう。

T．S．エリオットやW．S．モームも主張しているように、文学を読む目的は、知的楽しみを得ることであるべきで、読んでみても全然知的楽しみが得られないようであれば、そのような文学作品や作品の部分は無視してよろしいのである。少なくとも、これが世間一般の小説の読み方であろう。その意味では、「鯨学」は作品の中の極めて一般受けのしない部分であるとしか言いようがない。

以上述べたごとく、作品『モウビー・ディック』がその構成の中から「鯨学」という相当量のスペースを差し引かれた（実際上の）縮刷版として、一般の読者に読まれ、その上で名作として愛読され高く評価されているとすれば、それでは一体この「鯨学」という部分は作品全体の中で何であるのか。これは、　文学を研究する者にとって、当然提起されるべき問題である。一体、何か？

I

この問題については、当然なる問題であるが故に、『モウビー・ディック』について論ずる研究家は誰も、何か言及している。しかしながら、他方では、この問題を特別に重要な問題として扱っている研究家は（筆者の知る限りでは）ひとりとしていない。何かは言っているが、それ以上のものではないのである。

こうした現象は、考えてみれば不思議な現象であるが、それなりの正当性もないことはないと言える。

メルヴィルの死後30年ほど経過した1920年代に入って、故人の生存中は冷たく扱われた『モウビー・ディック』が一躍注目を浴びるようになるが、そうなると今度は、この作品を高く評価しない学者の方が不利になってくる。そして、偉大な作品

として論ずる時、それら学者のエネルギーの大半は、作品のもつ象徴性についての解釈に費されて来たと言って過言でない。一般向けの読書案内であるＢＡＲＮＥＳ＆ＮＯＢＬＥ社のＢＯＯＫ ＮＯＴＥＳも解説しているように、『one could start a small library with what has been written――much contradictory――about the symbols in the novel。』とさえ言えるのである。モウビー・ディックという白鯨が、あるいはエイハブ船長が、一体何を象徴しているのか――というアレゴリー論もしくはそれに類した論については、うんざりするぐらい語りつくされているし、またこの小論の直接の目的と関係ないので、ここでは立ち入らないことにするが、少なくとも異議のない事実は、この種の「伝統的」とも言える議論はエイハブ船長と白鯨との対決をその終結とする追跡の物語としての『モウビー・ディック』を主として問題にしているという点である。諸論者の主張するアレゴリーが何であれ、それは、言ってみれば、鯨とりのお話としての『モウビー・ディック』に対するコメントであって、ここで問題になっている「鯨学」はいきよい論外に置かれがちである。「鯨とり」としての物語である『モウビー・ディック』がいかに偉大な作品であるかという議論が、各論者のそれぞれのアレゴリー主張という観点から論じられ結論されたのちにはじめて、「鯨学」という文学上の常識を破った不可解にさえ見える部分について、すでに決定されている各種アレゴリー主張に論理的に合った線で論評がなされるのである。もちろん、「鯨学」は、（そういう作品の読み方からすれば）第二義的部分と見なされているわけだから、第一義的部分であるその他の部分についての肯定的価値評価が結論されている以上は、ことさら問題にされなくてもいいと言うことになってしまう。従って、コメントの上で全く無視するのには余りに大量すぎる「鯨学」は、それのもつ作品の中での効果や目的について、各論議の主張に合致するか、それともその主張を補強する論理の中でのみ言及される。結果として、多くは語られない。

以上が、「鯨学」が評される際の大まかなパターンである。このパターンは、前にも言ったように、作品の特質上それなりの正当性を持つと言えるが、ここで問題になってくるのは、そのパターンの中で結論される「効果」や「目的」についての（全体として）言葉少なげな見解である。作品全体のコンテクストの中での「つじつま」は確かに合わされているけれども、決して「真理」をついているとは言えない見解が目につくからである。

W. M. Gibson 氏は、『メルヴィルの象徴のいかなる解釈も彼の劇的意味や彼の小説の全体的な効果を十分には包含することが出来ない。』として、イシュメイルがピークォド号乗組員の中でただ一人生き残るという作品上の重要な事実に、エイハ

ブやモウビー・ディックに関するアレゴリー論では言いつくせない作品の持つ文学的意味を示唆して、筆者は共鳴せざるを得ないが、この学者にしても、「鯨学」については、次の様に説明しているに過ぎない。

> ・・・These solid chapters of ballast hold the novel steadily to whaling realities; yet from them grows the credibility of much of the action and the overwhelming probability of Ahab's finding his quarry at the "season－on－the－line"; from them especially Moby Dick looms up ever larger and ever more potentially destructive, "ubiquitous" and "omniscient"－－"one grand hooded phantom, like a snow hill in the air."
>
> （下線は筆者）

「鯨学」をしてバラストと喩えたたこの比喩は、それ自体は大変洒落れた比喩の使い方で興味深いものではある。しかしながら、「鯨学」は、氏の言うように、『モウビー・ディック』と言う船の「バラスト」として機能していると言えるであろうか。筆者の答はNo! である。Never. とは言わないまでも、Yes. とは決して言えないからである。

確かに、よきバラストとして、作品を読み進む読者にすばらしい休憩を与え、したがって未だ姿を見せぬモウビー・ディックという白い巨体をした鯨に対してより一層の興味を覚えるように読者を導く章が「鯨学」の中にないわけでもない。その典型的な例が第42章の The Whiteness of the Whale（鯨の白きこと）である。この章は、イシュメイルにとって白鯨がいかなる意味を持つかについて、語り手が実に雄弁に論ずるという構造を特っているが、この章だけ独立しても立派に第一級のエッセイとして成立し得るだけの内容を内包しており、『モウビー・ディック』号という船による長旅の途中に於ける、この上ない文学的憩いを与えてくれる。バラストとしての機能は最高であると言わねばならないだろう。鯨についての他の章がすべてこの章のように書かれていたならば、読者にとっては、待ちどうしい「船上議義」にさえなったであろうし、確かにGibson氏の言うように、まだ見ぬ白鯨も『ever larger』に『ever more potentially destructive』に見えてくるのは期待できるかも知れない。だが、事実はむしろ反対なのである。

プロットの上では、『スタッブとフラスクがせみ鯨を屠り、それについて談義』したあと、読者は、語り手イシュメイルによってつぎのように誘いを受ける。（第

74章、冒頭）

> Here, now, are two great whales, laying their heads together; let us join them, and lay together our own.

この章は、プロットとの関連がかなり考慮されてはいるものの、ここに至るまでに拝聴した鯨の実にさまざまの話に相当の食傷ぎみを自覚せずにはおれない読者達にとっては、割愛せずに読むことは非常に強い意志の力を必要とするであろう。

うんざりさえし始めている読者をさらに案内して、イシュメイルは曰く。（第75章、冒頭）

> Crossing the deck, let us now have a good long look at the Right Whale's head.

抹香鯨とせみ鯨とは全然違った頭を所有しているという事実を説明するだけにしては、これら二章の比較論は、他の「鯨学」の章と同様に、余りにも饒舌に過ぎていると言わねばならない。この種の饒舌がこれほどまでに繰りかえされることに、例外的な興味を持った読者は別として、普通の読者は「知的楽しみ」を覚え続けることは不可能である。先の「バラスト」の比喩を借用して表現すれば、この付近（第74、75章）では、もはや「バラスト」であるべき「鯨学」は作品『モウビー・ディック』号のバランスを助けるよりも妨げる方に、さらには船足を遅らしては進行を邪魔する方向に、機能していると言わざるを得ない。これにつれて、読者の「知的楽しみ」の吃水線は今や海面下に没しはじめている。しかも、エイハブと読者の待つモウビー・ディックは未だ海面上にその白い巨体を現わしていないのである。

『せみ鯨は禁欲派であり、抹香鯨はプラトン派に属し、後年にはスピノザを伴とした。』という推論でもって第75章をやっと終えてくれるイシュメイルは、抹香の頭と訣別することを依然として読者に許そうとはしない。　次のような要請が次章（第76章）の冒頭でなされる。

> Ere quitting, for the nonce, the Sperm Whale's head, I would have you, as a sensible physiologist, simply ―― particularly remark its front aspect, in all its compacted collectedness. I would have yon investigate it now with the

sole view of forming to yourself some unexaggerated, intelligent estimate of whatever batteringram power may be lodged there. Here is a vital point; for you must either satisfactorily settle this matter with yourself, or for ever remain an infidel as to one of the most appalling, but not the less true events, perhaps anywhere to be found in all recorded history.

Gibson 氏の言う「バラスト」としての機能を『these solid chapters』が持っているとは言いがたいという点については、以上の検討で明らかになったと言えるだろう。氏は「鯨学」の故にエイハブ船長の行動が一層リアリティを有し、さらにはモウビー・ディックも『one grand hooded phantom, like a snow hill in the air』としての存在が一層鮮烈に読者の目に映ってくると述べているが、それは、以上検討してきたように、余りにも「つじつま」を合わせた論理と言わねばならない。読書に於ける「効果」とは、読書する人間が主体性の下に作品と交際するというリアリティが存在してはじめて、その交際の産物として生じるものである。「鯨学」を読むという時間が存在してはじめて、それら特殊な章の全体のコンテクストに与える「効果」について考える時間を持つ権利を読者は得ることを忘れてはならない。一見説明がつくが如くに見える説も、こうした基礎的な「時間の論理」に基づいていなければ、真理からは遠いと言わざるを得ないだろう。

また、「鯨学」の創作上の「目的」についても、個の全体に対する意味を想像する形で一言で片づけられている場合がほとんどである。「鯨学」という相当量のスペースを占める「個」を引き去っても十分に傑作として成り立つ作品『モウビー・ディック』は、最後のページを読み終って「全体」に対する評価を持ち始める読者に対して、試問を開始する。先ず、各自が読了するまでに引き去った「個」としての「鯨学」の量について問う。次に、引き去った動機について、その共通なポイントを指摘させる。さらに進んでは、次のような仮定の質問を出す。もし引き去った部分を隈なく読んだとして、君は君の読後感に影響があると思いますか？

第一の質問については、被試問者は事実を正直に述べればそれで合格である。第二の問については、答える者に若干の抽象能力と表現力を要求するが、事実を述べさえすればいいという点では前の問と大差ない。問題なのは最後の問である。正解はただ一つしかない。それは極めて簡単であり明瞭である。即ち、「それについては、実際に読んでみなければ、何とも言えません。」である。ところが、そのように答える者は多くない。第二の問の動機と関連づけて、仮定の上の答を語る者が多い。

「全体」としての『モウビー・ディック』について、それなりに秀れた評価を持っている者は、その中の「個」については、たとえ詳細に読んではいなくても、多くを語る余裕さえ持ちあわせている。しかしながら、いくら多くを語っても、語っている内容は一言にすぎない。一言で「問題になるような影響はないと想像します。」とだけ言っているにすぎない。試問官は最後に言う。「では、その部分を実際に読んで来なさい。その上でもう一度来て、第三問を仮定の問題から実際の問題に変えて答えなさい。」と。再度被試問者は来て答える。「想像していた通りでした。」と。

凡そ慎重な読者なら誰もが、このような試問を自らに課し、自ら答えるであろう。もちろん、実際に読んで第二の自問自答を演ずるかどうかは別にしても。

最も慎重な読者であるべき職業的読者、即ち研究者は、第二の自問自答をする必要がない人々か、または、当然する人達である。言いかえれば、その必要のないほどに初回から一言一句残らず読破するか、もしくは、初回に飛ばした箇所は第二回目の読書で補うかのいずれか、であると言えよう。いずれにせよ、この職業的読者について不思議なのは、彼等の中にさえも「想像してもいない」影響を受けたと言ってことさら問題にする人はいないという事実である。我々がここで「鯨学」と呼んできたところの縮刷版には見ることの出来ない箇所は、それでは一体なんの「目的」で加え入れられたのであろうか。職業的読者といえども、この点に関しては、理解出来ない事の方が多いようであるとしか言えない。なぜなら、この点については論らしい論は（筆者の知る限り）存在しない。存在しても、次のような全くナイーブ（あまり良い意味ではなく）な発想から出たものにすぎない。即ち曰く、「この小説は追跡の物語であるからして、これら筋から全くはずれた章が多く挿入されることによって、読者は追跡の終結を次から次へ延ばされる楽しみを味わう。この目的の為に作者メルヴィルは工夫したに違いない。」これは、研究者の推論の多くに共通して見られる論旨である。確かに、これで一応説明はつくのである。しかし、この種の一言の説明で「鯨学」は片づけられ得る性質のものであろうか？

II

答は、（筆者に多少ドラマチックに言わせてもらえば）『Never !』である。

この「鯨学」の存在についての問題を考える為には、我々は何よりも「虚心」な心でもう一度慎重に作品全体を読みかえすという作業をしなければならない。もちろん、このような強い意志なくしては不可能な作業は、一般の読者には必ずしも必要でないかも知れない。彼等の多くは、ここで問題にしている「鯨学」とは関係が

深くなくとも、他の文学作品では求めることの不可能なエイハブ船長という人物の持つ運命的な悲劇性の前に、各自それぞれに文学でしか味わうことの出来ない感動を経験するであろう。あるいはまた、この白鯨の追跡という物語の中に、自分なりのアレゴリーを発見するであろう。それもまた文学の我々に与える「知的楽しみ」」であることは誰も否定できない。自分なりに「鯨学」を割愛しながらも、全体としての作品からそのような「知的楽しみ」が味わえれば、それはそれなりに、『モウビー・ディック』は文学作品として十分すぎるぐらい価値を持つと言える。そのような読者に「鯨学」の存在理由を求めての作業を期待はできない。そのままでも十分に彼等にとって『モウビー・ディック』は文学である。従って、ここでの作業は、ある意味では、極めて専門的な作業と言える。秀れた文学作品の研究には、何をさしおいても、秀れた読者としての研究者が必要であることは言うまでもないが、『モウビー・ディック』という作品の研究には、「秀れた読者」以上の要素が他の作品の場合にも増して要求される。極端な言い方が許されるならば、「読者」として「読む」ことには、（もちろん、それがアプリオリに重要であるが、）研究者として限界があると言うことである。「鯨学」の性質上「読者」として読むことは一般的に言って極めて難渋である。このことについては、既に検討してきたが、だからと言って「読者」としての立場を捨ててしまえば、一番大切なものを捨ててしまうことになる。結局のところ、「読者」としての立場から読んだ上に、「読者」として読み飛ばした部分を「読者」として初回に持った評価と切り離して慎重に読むことが必要である。「虚心」とは、「鯨学」以外の部分（即ち、鯨の追跡としての物語の部分）によって成立した作品に対する見方に先入観的影響を受けてはならないという意味である。このことは、特に「鯨学」を読みかえす場合、二重に重要である。小説としての構成上、「鯨学」は（前にも言及した通り）第二義的位置を持つ。必然的に第一義的位置を持つ構成部分の印象下に「鯨学」は読まれやすいことになる。これだけの意味で「虚心」が重要視されるのならば、何も『モウビー・ディック』に限ることはないかも知れない。実は、この（言ってみれば）心がけの重要なもう一つの理由は、他ならぬ「鯨学」自体の中に存在するのである。一言で言えば、「鯨学」は作家メルヴィルによって「虚心」とは反対の創作的態度で書かれているという事である。

メルヴィルがいかにトリックに満ちた手法で『モウビー・ディック』なる作品を書いているかについては、Lawrance Thompson 教授の *Melville's Quarrel with God* という論文の中で詳しく例証されている。いまさら指摘する必要はない。しかしながら、このセンセーショナルな論文の主張する「deceiving」な手法

とは、主として対キリスト教徒というコンテクストに於けるそれであって、我々がここで問題にしている「鯨学」という観点からのものではない。

教授の説によると、この小説の読者には三種類の層があって、第一の層は、海上の冒険物語として読む層、第二は、キリスト教的世界観を肯定し称賛する本として読む層、そして、第三の層は、第二の読み方は実はメルヴィルのトリックによって騙された読み方だとする層である。この『triple talk』として『モウビー・ディック』をとらえる説は、「対キリスト教徒」というコンテクストでのトリッキーな手法のあり方を具体的に説明しているが、「鯨学」という存在自体が実は大きな創作上のトリックだという点については、説明不足である。

「虚心」に「鯨学」を読みかえす作業を行なうと、その過程の中で意外な特徴に数多く出合い驚かされるが、その先ず最初の驚きは、皮肉にも「鯨学」の中の鯨学である第32章『鯨学』の冒頭に於てである。

> Already we are boldly launched upon the deep; but soon we shall be lost in its unshored harborless immensities. Ere that come to pass; ere the Pequod's weedy hull rolls side by side with the barnacled hulls of the Leviathan; at the outset it is but well to attend to a matter almost indispensable to a thorough appreciative understanding of the more special leviathanic revelations and allusions of all sorts which are to follow.

この章は、そのタイトルの示すように、百科辞典の一章を連想させるに十分なぐらい詳細な解説が『鯨に関するあらゆる特殊の知識文献に通暁する』ため後続する。ロマンチックで哲学的な薫りさえ漂わせている書き出しに始まり、次々と登場する人物の魅力的な紹介、ナンタケットの捕鯨港としての独特の雰囲気の描写――これらは全て、はじめて読む人の心をいやがうえにも興奮させ、夢中になって読ませる。ピークォッド号の出帆につれて、読者の緊張の度はいよいよ高まる。そこにこの全く異質の章が現われる。この異常と言って誇張でない構成のあり様に戸惑を覚えない読者は恐らくいないであろう。もし仮に、この章を読み飛ばすことなく、メルヴィルの試みに忠実に付合ったとすれば、それは丁度、すばらしい映画がいよいよ佳境に入ったところで席を立ち、近くの博物館へ足を運び映画に出てきた事物について特殊の知識文献を漁ることに残りの半日を費すことに似ていると言える。たとえ

物知りになったとしても、せっかく楽しんでいた文学的興奮が冷めてしまうことは否めない。我々の頭は、作家が熱心に解説する鯨学の内容よりも、むしろ『鯨学』なる章の存在自体に対して疑問を持つことに占められる。

以上は、この章にはじめて出くわした読者の一般的反応を説明したにすぎないが、ここで問題にしている「鯨学」の読みかえしの作業は、実は新たな驚きを我々に提供する。言いかえれば、作家メルヴィルは既述のような読者の反応を計算に入れた上である創作上のトリックを試みているのである。

この（引用）冒頭の一節の言わんとするところは、ピークォッド号は出帆したが、遠く大洋に乗り出す前に、ここで鯨について詳しく知ることは意味のあることではなかろうかという事である。後に続く詳細すぎる文献学的解説への「つなぎ」であるが、我々はその百科辞典の抜萃と錯覚しかねない内容と記述法に、たとえ一瞥しただけでも、大なり小なり眩惑されてしまい、当の冒頭文の本当に意味するものに注意が散漫になりがちではなかろうか。

この散漫な注意を計算に入れて、メルヴィルのトリックが始まる。『Ere that come to pass』にセミコロン(;)が打たれ、それに続く『ere the Pequod's weedy hull rolls side by side with the barnacled hulls of the Leviathan という文が書かれるが、このセミコロンを挟んだ二つの文は必ずしも意味が同じではないのである。前者を換言するという体裁で後者の文が書かれてはいるが、注意深く読むと、これは書き換え以上のものであることに気づく。前者の『that』は前の文の内容を受けて、船が岸辺も港も見えない大洋に乗り出すことを示している。従って、全体の意味は、「そのようなことが起る前に」となる。ところが、後者は船が大海深く進むこと以上に、『the Leviathan』即ちモウビー・ディックに船が出合うことを意味する。さらには、（ここからが最も重要であるが、）ピークォッド号がモウビー・ディックと対決したあとの結末をも暗示しているのである。即ち、船が海底に沈むというイメージがここで暗示されているとしか考えられない。そのイメージを換起する働きを『weedy』と『barnacled』という二つのエピセットが有効になしているからである。どちらも海の、しかも海中よりは海底のイメージである。もちろん、船体に海草が生えることは barnacle 同様に珍しいことではないが、問題はこの文のコンテクストでのこれらのエピセットの存在の仕方である。船が鯨ともども rollしているというのが、両者の出合いと対決だけを意味するのなら、『weedy』も『barnacled』も必要のないエピセットと言うしかない。「出合い」や「対決」にとっては、海面上見えるところの船の様子や、それに対峙する鯨の船から見える様子は必要ではあっても、目に見えない海面下の海草や貝殻

のイメージは用のないものである。少なくとも、不自然なイメージである。『rolls side by side』しているのが海上での出来事である限りは、船と鯨の『hull』の両方にこれらのエピセットが付されて描写されることは不自然さを否めない。そういう風に考えると、海上で船と鯨が『rolls side by side』するのに、hull（帆や帆柱などは除く船体）とhullとがそうすると描写すること自体が不自然だということになる。セミコロンの前の文と同様の意味でピークォッド号が海上にあり、船がモウビー・ディックと海上でのたうつ（『roll side by side』）と言うのなら、例えば『ere the Pequod rolls side by side with the Leviathan』と書く方がより自然であろう。海上で船と鯨がのたうつというのに、わざわざhullとhullがのたうつと表現するのは不自然である。なぜなら、海上であるかぎり、hull以外の上方の部分の方が人の目を引くからである。ましてや、海草のはえた船底の部分や貝殻の生えた鯨の巨体というものは、海上での存在ではない。やはり、船も鯨も海底に存在しているし、その上で『rolls side by side』しているのだと受け取る方が幾倍も自然である。海底でピークォッド号もモウビー・ディックも横たわっていると考えれば、貝殻のはえたモウビー・ディックの体というのは、死体としてかなり時間の経過したものであろう。貝殻も海草も「海底」のイメージとともに「時間の経過」のイメージを持つ。

以上の検討で明らかなように、この冒頭の一節は、ピークォッド号が出帆して大洋へと進んでいるという事の他に、意外にも、この捕鯨船が沈没してモウビー・ディックともども海底に横たわっているというイメージを暗示しているのである。船が出帆したばかりの時点で、このようにはっきりと船の終末の姿を暗示しているという事実は、全く意外である。しかも、このような暗示が、他でもなく『鯨学』という我々が問題にしている「鯨学」の中でも最も典型的な章の冒頭に於て提示されているのである。その意味では、この章は、前述の構成上の驚きと相まって、二重の驚きを与える章である。メルヴィルは、『われらはすでに大胆（boldly）にも大洋に乗り出している。』と述べているが、考えてみれば、彼の創作家としての態度は、その鯨学の記述の仕方の徹底ぶりと言い、かくも徹底してプロットから横道に逸れてしまった章をかくも読者の緊張の高まり始めた位置に挿入する手法と言い、はたまた、ピークォッド号出帆直後の時点で早くもその海底での終末の姿を暗示する方法と言い、すべて大胆としか言いようのないものである。

先に「鯨学」という存在自体が「トリッキー」な面を持つと言ったが、以上詳しく見てきた第32章はその例のほんの一つにすぎない。一つにすぎないが、既述のピークォッド号の「海底」のイメージの暗示法ひとつにしても、もしこの暗示が同じ

鯨の記述にしても、もっとプロットや登場人物と関係を持った「鯨学」の中で行なわれたら、どのように読者の反応に変化が生じるか、または、当然生じるであろう読者側のこの章に対する戸惑についての作者の計算とセミコロンのいたずらとのコンビネーションが、もし十分にかみ合っていなかったら、どうなっているか——等の問題を考える時、作家メルヴィルの創作上の意向がどのようなものか教えるところ大である。

前述のThompson氏は、思想の面から言って『モウビー・ディック』は読者を三つの層に分けると主張している。この指摘は全く当を得ていて、多くのことを我々に教えてくれるが、残念ながら、この作品には創作手法の点から言っても大胆な構成上の層が試みられている点、その構成上の層と思想上の層には実は重要な相互関係が存在する点を忘れているようである。筆者は「鯨学」の最も典型的な章である『鯨学』について、その創作上のアプローチは、いろんな意味で「大胆」であると言った。この「大胆」さは、他の「鯨学」的章の中でも形をさまざまに変えて姿を現わす。そして、重要なことは、「鯨学」というはっきりした構成上の「層」の中に存在する創作家メルヴィルの各種姿を変えた「大胆さ」は、（対キリスト教という観点以外でも）思想上の読者の「層」に対して、実にさまざまの技法を使って「トリッキーに」働きかけている点である。

筆者の指摘した『鯨学』の冒頭におけるピークォッド号の「海底」イメージの暗示を例にとれば、このトリックは、『モウビー・ディック』を「海洋冒険物語」として読む読者層に対してさえ、少なからず影響を持つと言えるのである。読者の層とは、一言で言えば、作品を何として読むかによって色別けされる層であるが、この層に（対キリスト教の観点から観るにしろ観ないにしろ）「鯨学」という作品構成上の層が関係を持たないはずはないのである。持たないためには、「鯨学」は余りに量が多いし、余りに作家の大胆な態度が（その量の問題も含めて）顕著であると言わねばならない。「鯨学」を除いた縮刷版を読んでも、（ある読み方として前述したように、）『モウビー・ディック』という作品の持つすばらしさは十分に味わえるが、だからと言って必要ないとしてしまうには余りに多くの問題を「鯨学」は内包している。特に、文学を「読者」としてだけでなく、芸術の一分野としての文学を創作という立場から理論的に模索するという「楽しみ」を求める人にとっては、限りない材料をこの「鯨学」の研究は与える。このことだけは確実に言えるし、未開の分野と言っても誇張ではないと言う意味では模索のしがいがあると信じる。

III

「鯨学」とは一体なにか？　『モウビー・ディック』という小説を読んだ人なら誰しも、この問題を大なり小なり考えてみるに違いないが、別にこの問題について深く考えることをしなくても、既に得ることの出来た文学的「知的楽しみ」がなくなる訳でもないという理由で、ことさら問題化する人は（もちろん、研究者も含めて）意外に少ないのである。しかしながら、以上検討してきたように、だからと言って放置しておくには余りに大量のスペースを所有する。これは、イシュメイルとクィーケッグとの関係が、エイハブの描写に劣らず大量のスペースを作品の中で占めている問題と同様に、ともすると忘れられがちな点である。さらに、「鯨学」の中に登場する創作家としてのメルヴィルの姿は、時として語り手イシュメイルの仮面をかなぐり捨てては、大胆に、しかも巧妙に、顔を出す。この意味からも、メルヴィルを研究する者にとっては、研究に価する問題である。決して、「一言」で片ずけられる問題ではない点は以上の考察からだけでも示されたと思うが、『Never！』の意味を十分に理解してもらうためには、この小論の第一回目の検討は、（メルヴィル流に鯨の比喩で表現すれば、）捕らえて皮を剝ぎかかったに過ぎないが、「鯨学」の存在の問題は、『モウビー・ディック』という作品の、さらにはメルヴィルという作家の研究には欠くことの出来ないものであることは、剝がれた皮の面積の分だけでも理解できたと信じる。今後の検討では、今回の検討で指摘した「鯨学」の全体に対する働きの重要性について、さらに解剖を加えるつもりである。

Notes

1. T.S. Eliot, "Literature and Religion," *Selected Essays* (1962) p.134
2. W.S. Maugham, *Ten Novels and Their Authors* (1963) p.198 p.198
3. See: Raymond Weaver's biography, *Herman Melville, Mariner and Mystic*, published in 1921
4. Barnes & Noble, *Book Notes, Moby Dick* (New York, 1968) p.87
5. William M. Gibson, the introduction of *Moby Dick* (New York: Dell 1967) p.14
6. Ibid., pp. 12−13
7. Herman Melville, *Moby Dick.* (New York: Dell, 1967) p.363

8. Ibid. p.367
9. Ibid., p371
10. Lawrance Thompson, *Melville's Quarrel with God.* (Princeton: Princeton University Press, 1952.)
11. Herman Melville, *Moby Dick.* (New York: Dell, 1967) p.159